
アニメの世界へようこそ！

アルフォンス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アニメの世界へようこそ！

【Nコード】

N2570A

【作者名】

アルフォンス

【あらすじ】

朧達是最遊記世界のある街の飲食店にいた。そこに、同席となつた三蔵一行達。これが、朧達と三蔵一行の出会いだった……。

キャラ説明

つきよ
おぼろ
月夜 朧

現在世界の愛知県に住む、12歳の中学1年生の女。
明るい性格。だが、差別などが多すぎるのが傷。

最遊記世界では、悟浄と気が合うらしい。

三蔵にはうつつとうしがられている存在ともいえる。

悟空は、苦手な様子。

八戒は、何でしょう？

江 テイト（こう ていと）

現在世界の愛知県に住む、12歳の中学1年生の女。

男口調が特徴。

三蔵達も恐れている、魔法薬が武器（？）

性格は、腹黒い。だが、たまに、三蔵と同じようになり、悟空と同じになったりする。（多重人格らしい）

最遊記世界では、悟空と気が合う。

三蔵は、テイトに「江ちゃん」などと呼ばれている。（ある意味、自殺行為）

悟浄と八戒……はいまだ、よくわからず。

巳伊 ロート(しい ロート)

現在世界の愛知県に住む、12歳の中学1年生の女。
八戒に似た性格の人物。

以外と、腹黒い^^

八戒に恋する中学生といった感じ。
八戒以外とはあまり、気が合わず。

煉^{れん}

朧の好きな人。 同い年。

アニメの世界へようこそ！第一章

「お客様、今、席がココしか開いていませんのでご承知ください。」
店内の案内役がそう言いました。

4名の客とは、あの三蔵一行。そして、同席となったのは臃おぼろ、テイ
ト、ロートだった。

「悪いな。お嬢ちゃん達。」と悟浄が臃達に誤りました。

「いえ、おかまいなく。」ロートが丁寧に言いました。

「三蔵、腹減った！！」テイトの隣に座っていた、悟空が言いました。

臃達は顔を近づけ、なにやらヒソヒソと話をしています。

「……………だろ。」 「ホントに？」 「ああ」と言

う声が聞こえます。

三蔵一行が注文をたのんでいる間、臃達はまた、話あっています。

それを、三蔵は見逃しませんでした。

注文の料理が運ばれてくると、悟空はいつきに料理を口に運びました。

でも、その行動は臃達のヒソヒソ話に消されてしまいました。

「おい。さつきから、何を話している。」三蔵がキツイ声で臃達に
言いました。 テイトは三蔵と目があつたが、無視し、話を続けた。

そして、「いえ。こつちの話なので。」とロートが言いました。

「じゃあ、なんでこつちを見ながら話すんだよ。」悟空が言いました。

「なあ、なんて答えればいい？」 テイトが臃とロートに聞きました。
「さあ」と臃が言いました。「自分で考えてよ。」 ロートがジュースを飲みながら言いました。

「じゃあ、なんとなく。」 テイトが三蔵に言いました。

「それじゃ、答えになってないだろーが！」 三蔵が怒鳴りました。

「答えたじゃん。さてと、ココ出ますか。」 臃達は立ち上がりました。
た。

「そこ、通してくんない。」 臃が言いました。

「答えたらな。」 悟浄が言いました。

「さつき、テイトが答えました。」 ロートが少し大きな声で三蔵一行に言いました。

「ちゃんと、答えてねーじゃん。」 悟空は、三人を見つめて言いました。

「なんとなく。はい、言った。」 テイトがまたしても、同じ答えを言いました。

三蔵がハリセンをだしました。

「お！三蔵様のハリセン攻撃だ！」 テイトがニツと笑って言いました。

「なんで、三蔵のハリセンをしってんだ？」 悟空が聞きました。

「漫画で読んだから……… あっ」 テイトはつい、口が滑ってしまいました。

「……漫画!？」 「……三蔵一行の声が重なりました。」

テイトが三蔵一行に話すこと2時間。ようやく、三蔵一行も理解できました。

「そうだったんですか。ブラック・ホールに吸い込まれて、この世界に飛ばされたってことですか。気の毒ですね。」八戒がお茶を飲みながら言いました。

「信じてくれるの？」臃おぼろが聞きました。

八戒が「ええ。嘘を言っているようでは、ありませんから。」と答えました。

「じゃあ、自己紹介でもしますか。」梧浄が言いました。

「俺、孫 悟空。好きな物は食いモン！口ぐせは、腹へったかな。武器は、如意棒！」悟空が元気に答えました。

「俺は、玄奘三蔵。」三蔵は名前だけで終わりました。

「三蔵の子供の時の名前、知ってるよ。」テイトがいました。

三蔵は固まっています。

「漫画で読んだしね。」臃が言いました。

「僕は、猪 八戒です。年齢、22歳。好きなことは、料理です。武器は使用していません。主に、気孔術ですね。」八戒が丁寧に言いました。

「俺は、沙 悟浄。年齢は22歳。好きなものは女。武器は、刃。」

「次は、お嬢ちゃん達だぜ。」悟浄が言いました。

「私は、月夜 臃。好きなことは、ありません。年齢は12歳です。」

臃が三蔵一行に自己紹介しました。

「私は、巳伊 ロート。好きなことはありません。年齢は12歳で

す。」

ロートも臃と同じように自己紹介しました。

「俺は、江 テイト。好きなことは、魔法薬の調合と読書。年齢、12。ついでに、臃の好きなことは煉を見ること。」テイトはこれだけを言いました。

「……俺?!」「……三蔵一行はテイトの『俺』という自己発言に驚いています。

「お前、女だろ。」悟空が言いました。

「人のかつてだろ!」テイトが悟空に言いました。

「人のかつてつて。女の子なら、私だろ普通は。」悟浄が言いました。

「……」テイトはだまっています。

「さあ、そろそろ、ココを出よう。」臃が皆に聞きました。

「そーだな。腹もいっぱいだし。」悟空が笑いながら言いました。

7人は勘定を払い、外へ出ました。

「なあ、三蔵。暇。」悟空が言いました。

7人は、通りをぶらぶらと歩いていました。

「だったら、あそこの3人と話でもしてろ!」三蔵が悟空に向かって怒鳴りつけました。

「違う!違うもの!」臃が顔を赤くしながらテイトとロートに言っています。

「臃、隠し事はよくないぜ。そんなこと、黙ってたんだからな。」テイトがニヤリと笑いました。

「臃、白状したね^^」ロートは楽しそうに言いました。
すると、悟空が「なあ。何の話してんだ？」と聞いてきました。

「悟空には、わからないぜ。」テイトが言いました。
「何だよ！俺にも教えるよ！」悟空が頬を膨らませながら言いました。

「臃の恋の話だよ。」テイトが言いました。

「恋？それ、うまいのか？」悟空は食べ物のことを言っています。
「やっぱり、わかってない。」

「恋は、人を愛するってこと。」ロートが悟空に説明しました。
「ふ〜ん。で、それがどうしたのさ。」

「臃がさ、煉にデート申し込んだだってさ。コイツ、俺等に隠してやがったな！って言ってたんだよ。」テイトが臃をヒジで小突きました。

「違う！隠してたわけじゃない。後から言おうと思って・・・」
臃が言いました。「ふ〜ん。それにしても、言うの遅いじゃない。」
「ロートが言いました。」

「うっ！」臃は凶星のようです。
「さあ、宿屋に着きましたよ。」八戒が皆に聞こえるように言いました。

20分後。部屋割りを決めることになりました。
「一人部屋、1。あと、二人部屋3です。じゃあ、クジ引きで！」
八戒が薄い紙を手持って、言いました。

皆、八戒の手の中の紙を握り、声をそろえて、「………せーの!」「………」と言いました。

その、部屋割りはいったいどんな、結果に?!

「1番は誰です?」八戒が言いました。

「俺だ。」答えたのは三蔵でした。

「2番と5番は誰です?」八戒が皆に聞きます。

「俺、5番。」と悟浄。 「私、2番。」臃が言いました。

「次に、3番と6番。」

「はいはい!俺、6番!」悟空が手を上げて答えました。

「俺、3番。」テイトが言いました。

「じゃあ、僕とルートさんですね。」八戒はニッコリ笑いながらルートに言いました。

「そうですね。」ルートも笑っています。

「そいじゃ、おやすみ。」悟浄が片手を挙げました。

「臃、悟浄には気をつける!何されるか、わっかんねーぞ!」と悟空の忠告。

「わかった。」臃はそう言うと、悟浄と共に部屋に行きました。

「じゃ、テイト。俺達も寝よーぜ!」悟空がテイトの腕を引っ張りながら言いました。

「ああ。」テイトと悟空も部屋に入りました。

「では、僕達も寝ますか。」八戒が言いました。

「ええ。」皆、眠りについたころ、臃達はこっそり、ベッドを向けだし廊下で話あっていました。

「ホントに、これでいいの？」ロートが不安げに言いました。
「いいんじゃない。これで。」テイトがあっけなく答えました。

「テイト、もうちょっと、真面目に考えようよ。」臃がため息をつきながら言いました。

「俺、AB型。」

「ねえ、今何時？」ロートが臃に聞きました。

「12時。」臃は腕時計を見て、答えました。

「さすがに眠いな。んじゃ、解散！」臃達は部屋に入り、寝ました。
臃の部屋の様子……

悟浄は普通に寝ていました。

臃は煉のことを思いながら、眠りの落ちました。

ロートの部屋の様子……

八戒は本を手に持って寝ていました。

ロートは、明日のことを考えながら眠りました。

テイトの部屋の様子……

悟空の寝相が悪く、ベッドは悟空が一人で使っていると聞いてもいいようです。テイトは悟空を押しつけて、ベッドに入りました。

『明日は、どんな一日になるのだろう……』

アニメの世界へようこそ！第一章2

宿屋の台所から、おいしい匂いがただよってきました。

「八戒！飯、まだ？」悟空がハシを持って、八戒に言いました。

「できましたよ、悟空。」八戒は微笑み、悟空の皿に卵、ベーコン、トマトを載せました。

「うまそー！いったただきまーす！！」悟空はすぐ、朝食に飛びつきました。

「あ、おはようございます。」八戒が、目をこすりながら台所に来た臃達に挨拶しました。

「おはようございます。」ロートが三蔵一行に挨拶をしました。

「あれ？テイトさんは、どうしたんですか？」八戒が臃とロートしからないことに気がつきました。

「テイト、まだ、寝てるんじゃないかな。」臃が言いました。

「起こしにいきましょうか。」八戒が言いました。

臃とロートは頷きました。

「あのさ、八戒。テイト、俺が起きた時からいなかったけど。」と悟空が答えました。

三蔵一行と臃とロートは、テイトが寝ていた部屋に行きました。確かに、ベッドにはテイトはいませんでした。

すると、外から「わあああ！」という叫び声が聞こえてきました。

「なんだ！」悟浄が窓の外を見ました。

外には煙が上がり、むせている声が聞こえます。

「悟浄は、黄色。」テイトが悟浄の口にガムを投げ入れました。悟浄は、いまのままだった。ただ、身体が女になっただけの話です。

「八戒は、黄緑。」八戒はガムを受け取り、口に入れました。髪は長く、腰まであります。

「ねえ、この魔法薬って男が女に変わって、女が男にかわるの？」
臃が不安げに聞きました。

「YES！」テイトは得意げに言いました。

「臃は、緑。ロートは、紫。で、俺は青。」臃達は同時にガムを食べました。臃は、目つきが変わっただけです。

ロートは、今まで通り普通です。

テイトは、顔立ちが変わっただけです。

「この効き目、いつまで続くんだ！」悟空が焦り気味に聞きました。

「一日。明日になれば、元に戻ってる。」テイトが言いました。

その後、臃達は三蔵一行にどやされることとなりました。

ジープに乗り、西に進んでから1時間。

「昨日は、大変だったな。」テイトが言いました。

「そうだね。」ロートが昨日のことを振り返りながら、答えました。

「テイトが、変なモン食わせるからだろ！」悟空が会話に入ってきました。
「変なモンとはなんだ！変なモンとは！！・・・八戒、ストツ
プ。」テイトが言いました。

「どうしたんです？」八戒がジープを止め、テイトに聞きました。

「あの植物、魔法薬50番に使い・・・」テイトが全部言い終わ

らないうちに、ジープは出発しました。

「おい！止めるってば！」テイトが八戒に言います。

「ダメだ。お前の作る物は恐ろしい。」三蔵が言いました。

「じゃあ、三蔵一行。俺の傑作の魔法薬33番を試してやるうか？
テイトの声がダークになっています。

「……………」三蔵一行の顔には恐怖が……………
「八戒、止める。」三蔵が言いました。

「はい。」

5分後、テイトがジープに戻ってくると、カゴいっぱいの小さな実がありました。

「なあ、テイト。それ、食べるか？」悟空がテイトに聞きました。

「ああ。食べる。けど……………」「うわ！すっぱーい！

！テイト、これ、メチャクチャすっぱいぞ！」悟空が水筒の水を飲
みながら言いました。

「悟空、人の話はちゃんと聞こうぜ。それ、ムチャクチャすっぱい
から。」

テイトが言いました。

「テイト、前から聞きたいことがあるんだけど。あの道具はいつた
い何処から？」

臃が不思議そうに聞きました。

「ポケット用に改造した。」テイトはスラリと言いました。

その時、いきなり雨が降りだしました。

そして、雷が臃達にあたりました。

「大丈夫か！」 悟空が叫びました。

「ああ。けど、この緑の光は？」 テイトが答えました。

臃達の身体は緑色のドームに包まれています。

「わかった。これ、元の世界に帰れるんだ！」 ロートが言いました。

「そっか。テイト達、元の世界に帰るのか。」 悟空が悲しそうに言いました。

「短い3日だったけど、楽しかったぜ！」 テイトはそう言うと、消えてしまいました。「テイト？」 ロートが呟きました。

「私も、おもしろかった。」 ロートもテイトと同じように最後の言葉と共に消えました。

「最高だった！」 臃も消えてしまいました。

臃達が気づいたところは、雨もやんでいました。

「あれ、夢？」 みんな、臃の家で倒れていました。

「夢じゃないみたいだ。これ、ほら。」 テイトがポケットから、7色のガムと写真をとりだしました。

「ホントだ。夢じゃない。」 ロートが言いました。

「最遊記の世界、楽しかったね。」 臃が二人に聞きました。

「そーだな。あ。この写真、俺が貰っていた？」

「OK」二人が返事をしました。

『三蔵一行、ありがとう』 三人は声をそろえて、言いました。その頃、悟空達は……

「なあ、今、テイト達の声しなかった？」 悟空が言いました。

「ええ。確かに聞こえましたよ。ありがとうって。」 八戒が答えま

した。

『テイト達も、サンキュな！』悟空が大声で言いました。再び、三蔵一行は西に向かいました。

「今、悟空の声が聞こえたよな。」テイトが言いました。

「うん。」ロートが静かに答えました。「そうだね。」臃も答えました。

『明日はどんな一日だろう』

〜終わり〜

アニメの世界へようこそ！第二章

最遊記の世界を旅してから、数日経ちました。
テイトとロートは、臃おぼろの家で遊んでいました。

「ねえ、臃の宝物ってなに？」ロートが臃に聞きました。
「知りたい？わかった。」臃はそう言うと、部屋を出ました。

臃が部屋に戻ってきました。

「私の宝物はこれ。」臃が四角い箱を開けました。

と、その時、その箱が眩しい光を放ちました。

「なに!？」ロートが叫びました。

光が消えるころには、臃達は部屋にいませんでした。

臃達はいったい何処へ、行ったのだろうか？

「痛い・・・ココ、何処？」臃が呟きました。

「やっと、起きたか。」臃は声のした方を見ました。

「あなた、誰？」臃はその声の主に聞きました。

「俺は、紅該児。ココで何をやっている。」紅該児が臃に聞きました。

「ねえ、紅該児。三蔵一行って知ってる？」臃は何気に紅該児に質問しました。「三蔵一行を知っているのか？」

「前に、一緒に旅してた。」臃が言いました。

「なら、お前を囮に使う・・・。」紅該児はそう言うと、何かの

言葉を唱えはじめました。

すると、臙の意識がしだいに薄くなっていきました……

一方、テイトの方はというと……

「わあああ！」 悟空の叫び声が聞こえます。

その声に三蔵と悟浄が部屋に入ってきました。

「どうした、悟空！」 悟浄が言いました。

「イッテー。ここがベッドでよかった。死ぬかと思っただぜ。」 テイトがベッドで体制を立て直しながら言いました。

「テイトー！」 悟空が涙未に飛びつきました。

「うわ！ 悟、悟空？ つーことは……またか……」

「何で、ココにいるんだ。」 三蔵がテイトに聞きました。

「臙の持ってた箱を開けたら、眩しい光が出た。で、気がついたらココにいたってわけ。臙とロートは？」 涙未はこれだけを言っただけ。

「臙とロート？ 知らないぜ。なあ、テイト。さっきから変な音が聞こえるぞ。」 悟空が言いました。

「ああ。MDプレイヤーのことが。聞く？ いい曲だぞ。」 テイトが悟空の耳に、イヤホンをつけました。

MDプレイヤーからは、『花びら舞い散る 記憶舞い戻る』という歌が聞こえてきます。

「ホントだ！ いい曲だ。あれ？ 歌が変わった。」

「全部、いい曲だから。悟空、それ俺のなんだけど……」悟空はテイトのMDプレイヤーを使っていました。

「んじゃ、テイトも一緒に聞こうぜ！」悟空が片方のイヤホンを送って渡しました。「サンキュ。」テイトはそう言うと、悟空と一緒に音楽を聞きました。

「あ、テイト！」とそこへ、八戒とロートが部屋に入って来ました。「ロート！臃は？」芥未が聞きました。

「臃？知らないよ。」ロートが答えました。

「ふーん。じゃ、いいや。」と、その時赤い風が吹きました。

「紅該児か！」三蔵が大声で言いました。

「マジ！」テイトは窓から外へ出ました。

「ホントだ。うわー。耳とがってる！」テイトが言いました。

「経文を渡せ。さもないと、この女を殺す。」紅該児が臃の首に鎌爪をあてました。

「卑怯だぞ！」悟空が叫んでいます。

「臃、気の毒に……」テイトの一言で臃が怒り出しました。

「コラ、テイト！！はよ、助けんかい！！」

「ヤダ……臃、ホントに気の毒だな。いつから紅該児の仲間になった？」テイトが言いました。

「違う！囷にされたんだよ！！」臃は激怒しています。

「そりゃ、かなり気の毒。ま、これも成り行きだな」テイトが言いました。

「成り行きですいません!!」臃はジタバタと足を動かしています。
「仕方ない。助けてやるよ。でも、元の世界に帰ったら本2冊おごりな!」

テイトが臃に聞きました。

「わかったから、早く助ける!」臃が地団駄踏んで言っています。
「悟浄、口開ける。」テイトは、悟浄の口に数的の魔法薬を飲ませました。

そして、次に、臃にその魔法薬を渡し、紅該児の口に入れました。
すると、悟浄と紅該児の身体がくっつきました!!

「テイト、この魔法薬……私が何度もやられたやつ?」臃がテイトに聞きました。

「ああ。魔法薬47番だ。悟浄、悪いが一ヶ月そのままだから。」
「なに!!」悟浄が叫びました。

「三蔵、テイトの薬恐ろしいな……」悟空が三蔵に聞きました。

「……ああ」

「テイトさん、怒らせるとヤバイですね^^」八戒は笑いながらいきました。

悟浄は紅該児ともめています。

「テイト、その薬、誰にでもくっつけることができるのか?」と悟空が聞きました。

「ああ。」「だったらさ……」なにやら悟空とテイトが話し合っています。

「悟空、GOOD IDEA!!」テイトが言いました。
テイトは、臙を呼びました。

「何……ぎゃー!!」臙の悲鳴と三蔵の声が重なりました。
「大成功!」悟空とテイトの声が同時にでました。

「コラ、バカ猿!元に戻しやがれ!!」三蔵が怒っています。
「一ヶ月の辛抱だ!」テイトが言いました。

「次は、八戒とロートだ!」悟空がはりきって言いました。
その後、ロートと八戒も同じ目に……

「悟空、これ、食べます?」八戒が悟空に聞きました。

「ああ。食う!」悟空は八戒の手にあった、まんじゅうを食べました。

「悟空、何やってんだよ。」テイトが聞きました。

「あ。テイトも食う?旨いぜ。」悟空がテイトに言いました。

「イラナイ……」 「いいから、食えっ!!」悟空はムリヤリテイトの口にまんじゅうを押し込みました。

「ゲツ!」 「うわ!」悟空とテイトの身体がくっつきました。

「だから、言ったる!いらないうて!」テイトが言いました。

「八戒に、だまされた!!」悟空は頬を膨らませながら言いました。
その一ヶ月後、皆元通りに戻りました。

その後、テイトと悟空は皆に怒られるハメになりましたとき。

〜終わり〜

アニメの世界へようこそ！第三章

皆の身体がくつついた事件から数日後、おぼろ朧達の前にある人物が現れました。「あ。朧！煉がいる！」テイトが前方を、指差して朧に言いました。「へ？」朧はビックリして答えました。

「れんって、旨いの？」悟空が朧達に聞きました。
「違う！」悟空の言葉に朧が反応しました。

「今さ、朧、違うこと想像したろ。」テイトが言いました。
「／／／／／」朧の顔が赤くなりました。

「あの。煉って方は誰なんですか？」八戒が聞きました。
「朧のコレ！」テイトが右手の親指を上げました。

「？」八戒は理解できないようです。
「そーか。朧の恋人か！」悟浄が会話に入ってきました。

「朧、いけつてば！」テイトが朧の背中を押しました。
「ちよつと。テイト！わあ……」

「月夜……」煉が目の前に立っていることで、朧の心臓はバクバクと音をたてています。

「ココ、何処なんだ？」煉が朧に聞きました。
「えつと。ココは、最遊記っていう漫画の世界なの。私達もあまりよく、知らなくて。でも、案内人がいるから大丈夫なの。煉君もよかったですら、一緒にどう？」朧は顔を赤くしながら、煉に聞きました。

「じゃあ、そうするよ。」煉は返事を返しました。

（よっしゃー！！煉と一緒に、旅できるなんて一生の思い出だわ！これは、恋の旅ね！テイトに何か、作ってもらおうと。） 臃の心の中で思ったこと。

そんなこんなで、煉を新たに三蔵一行に入れ、臃は幸せ気分でした。宿屋も決まり、奈奈にとっては今日のメインイベント！

ということで、今日の部屋割りにはテイトが作ることに……
「ほい。出来た。」テイトの一言で、奈奈が反応しました。

「ホントに、大丈夫？」臃がテイトに聞きました。

「ああ。臃、これ引け！」テイトが真ん中のクジを指差して言いま
した。

「わかった。」

クジ引きが終わり、みごとな結果になりました。

部屋割りは以下の通り。

一人部屋、2名 三蔵と悟浄
二人部屋1、2名 テイトとロート
二人部屋2、2名 悟空と八戒
二人部屋3、2名 煉と臃

臃は見事に煉と一緒にの部屋に！でも、八戒が「男女別でもいいんじゃないでしょうか？」と言いました。

で、部屋割りはやり直し。 女子3人の部屋割りは以下の通り……

一人部屋……テイト 二人部屋……ロート、臃

男子の部屋割りも、以下の通り……

一人部屋・・・三蔵

二人部屋・・・悟空と煉、八戒と悟浄

「結局、煉と同じ部屋になれなかった・・・」臃がロートに言いました。

「部屋、隣でしょ。だったら、話にいけばいいじゃない。」

「そういえば、ハンカチ落としたんだよね。何処いったんだろ。」臃が咳きました。

「ハンカチ？」ロートが聞きました。

「紅該児に、囮にされた時ハンカチ落としたの。」臃が言いました。

「あれ、お気に入りだったのにさ！」臃が頬を膨らませながら言いました。

「そうなんだ。じゃあ、一緒に探してあげる。」ロートが、臃に言いました。

臃はロートにお礼を言うと、すぐ寝ました。

と、その時。臃達の部屋の戸がトントンと鳴りました。臃が戸を開けると、そこに立っていたのは、煉でした。

「あ／＼／＼／」臃の顔が急に赤くなりました。

「よっ！」悟空が片手を上げて、臃に挨拶しました。

「あのさ。このハンカチ、月夜のдар？」煉が臃に白いハンカチを出しました。臃はそのハンカチを見ました。

「ホントだ。私の、ハンカチ！どこで、拾ったの？」臃は顔を赤くしながら、煉に聞きました。

「宿屋の外で見つけたんだ。」煉が言いました。

「あのさ。朧と煉は、こいびとってやつなのか？」と、悟空が朧と煉に聞きました。

「ノノノ違う！」 「違うわ！」 朧と煉の声が重なりました。

「いや。朧と煉は恋人だぜ。」とそこへ、テイトが会話に加わりました。

「あーテイト。やっぱりそうだったのか！」 悟空がテイトに言いました。

「悟空、ロート。これ、食べて。」 テイトが飴玉を二人に渡ししました。

飴を食べると、二人は驚きました。
なんと、煉と朧の心がわかるのです。

(確かに、恋人だったら嬉しい。けど、現実こんなことありえないし。でも、この、ハンカチがきっかけで私と煉が恋人になったりして!!！)

朧の空想の世界

『はい。これ、月夜のだろ。』と煉が言います。

『ええ。でも、何処でハンカチを？名前は書いてないけど・・・』と朧。

『僕が、月夜の物を間違えたことがあったかい。なかつただろう。僕が月夜のハンカチだとわかったのは、愛の力なんだよ!!』煉、現実離れしています。

『そう。愛の力なのね!』 朧も現実から離れています・・・

その後、二人は恋人同士になりました。
(って。メルヘン信じてるガキじゃあるまいし。)

「え！臃って、そんなこと思ってたのか！」悟空が驚きのあまり、叫んでしまいました。

「嘘〜」 「マジ！あれは、すごい想像だ。」とテイトもロートも言いました。

「何？？え？」臃はわけがわからず、あたふたしています。

「煉は何も思わないんだ・・・」悟空はつまんないという顔して言いました。

その後、臃は恥ずかしい思いをしました。

次の日・・・

「臃、よく眠れた？」テイトが臃に聞きました。

「全然。テイトのせいだ！」臃がテイトの頭を叩きました。

（あの後、とってもいい雰囲気だったのに・・・）臃は心でそう思いました。

「へー。そうだったんだ。」テイトが言いました。

「え？つて、テイト！！またその薬か！」臃が叫びました。

「魔法薬51番。ようするに、人の心が読める薬。」テイトが言いました。

臃とテイトは部屋を走りまわっています。

「お前等！静かにしやがれ！」三蔵が愛用の銃を取り出しました。

「三蔵、それだけは勘弁！」テイトが言いました。 「そうだよ。死んじゃうよ！」臃も続いて言いました。

そんなこんなで、再び三蔵一行は西に向かうことになりました。

〜終わり〜

アニメの世界へようこそ！第四章

元の世界に戻ってから、一ヶ月が経ちました。

朧おぼろ達は、学校が終わり、家に帰ることにしました。

「なあ、今日遊べる？」テイトが朧とロートに聞きました。

「遊べるよ。」ロートが言いました。

続いて朧も返事を返しました。

「じゃあ、俺の家に来てくれ！」テイトはそう言つと、髪を縛っていたゴムを取りました。10分後……

「「おじやまします！」」朧とロートが同時に言いました。

「何する？」朧が二人に聞きました。

三人は考えました。

「魔法薬 52番を二人に試さし……」テイトが全部言い終わらないうちに、朧がそれを止めた。

「ダメ。テイトの薬は恐ろしすぎる……」

「そう？楽しいけど^^」ロートは笑顔で答えました。

「ロートはいいけど。私は、試されてばかりよ！」朧が言いました。

「だって、お前。俺の実験台なんだぜ。」テイトが、スラリと言いました。

「……」朧、無言ですつ！

「ねえ、魔術やんない？」テイトが言いました。

「……OK」ロートの意外な返事に、朧は驚きました。

「何の、魔術？」臃が聞きました。
「召喚術。」テイトが答えました。
と、いうことで三人は召喚術をやることに。

「これでいいの？」ロートがテイトに聞きました。

「ああ。ペンタクルも完璧！」

臃達は召喚術を始めました。

ペンタクルから、眩しい光が！！

「イッター！ココ、何処だよ……って、テイトじゃん！」ペ
ンタクルの中には、悟空がいました。

「悟空？」テイトが、呟きました。

「ひょっとして、テイト達の世界なのか？」悟空がテイトに聞きま
した。

「ああ。立場、逆になったな。」テイトが言いました。

「腹減った……テイト、腹減った！何かない？」

「何もなし。」

「テイト！！」その時、別の部屋で召喚術をやっていたロートが、
慌ててテイトの部屋に入ってきました。

「どーした？」

「召喚術やったら、八戒さんが！！」ロートの言葉にテイトはため
息をつきました。

「八戒！」悟空が言いました。

「悟空。ココにいたんですか^^」八戒は、ニッコリ笑っています。

(と、いうことは・・・臙も) 思った通り、臙の悲鳴が・・・
「テイト！三蔵と悟浄が！」

数分後・・・

「と、いうわけで、自分で召喚した物は自分で管理しましょう！」
話あった結果、こういうことになりました。

「つーか、テイト。意味ないんじゃない。だって、私達、テイトの家に泊まるんだもの。」臙の言葉に、テイトはビックリしています。

「そーだった。親には、ばれないようにするしか・・・でもな〜。
風呂とかがな〜」

「じゃーさ。一緒に入れば問題ないよね^^」ロートが言いました。

「ロート、何言ってるの。男だよ。相手が・・・」テイトが言いました。

「そーだよ！」臙も続いて言いました。

「でも、タオル巻きつけとけばいいじゃん。水着とか？」ロートは、
思わぬことを口々に言いました。

「水着、なんてないし。」臙が言いました。

その後、夜まで話し合った結果、ロートの意見が問題ないということに・・・

(は、やばいよね^^)

臙達は、一階で夕食を食べ終わり、悟空達の所にこっそり持って行きました。悟空達の夕食終了、約 20分。

「旨かった」 悟空は満足気に言いました。

「残る行事は、あと一つ！風呂だ……」 臙の聲が枯れていきます。

風呂は、結局皆で入ることに……

1時間後……

「気持ちよかった」 悟空の顔が赤くなっています。

「悟空。顔が赤いですよ。のぼせたんですか？」 八戒が悟空に聞きました。

「そーかも。なんか、頭クラクラする……」

「じゃ、もう寝ようか。」 テイトが言いました。

布団に入ると、なんか窮屈みたいです。

「狭いね……」 ロートが言いました。

「そーだね。」 臙も続いて答えました。

悟空は布団に入るなり、すぐ寝てしまいました。

『明日は、どんな一日になるのだろう』

～終わり～

アニメの世界へようこそ！第五章

三蔵一行は、とある街に着きました。
そこは、とてもにぎわっています。

この街は、年に一度のお祭りがあります。
今日が、そのお祭りだそうです。

「お祭り お祭り」 臃おぼろが嬉しそうに言いました。

「何、浮かれてんの？」 テイトが聞きました。

「だって、今日はお祭りよ！花火が見れるじゃない。」 臃おぼろが言いました。

悟空は、さつきから腹減ったを連発しています。

「あ。ごめん。大丈夫か？」 テイトが誰かにぶつかりました。
ぶつかったのは、7歳ぐらいの少年でした。

少年は首を横に振りました。

「そっか。」 テイトが粒やきました。

少年は、臃おぼろをじーっと見ています。

「ママ」少年が呟きました。

「え？」 ロートはビックリしています。

「ママ！」 少年は今にも、泣き出しそうな顔をしています。

「迷子でしょうか？」 八戒が言いました。

「さあな」三蔵が言いました。

「腹減った」 悟空は、空腹を100回訴えています。

「ママ！」少年は臙を指差して言いました。
「ええ！」臙が驚きのあまり大声を出してしまいました。
「パパ！」今度は、煉を指差して言いました。
「この子、どーするの？」ロートが皆に聞きました。
「置いてけば」テイトが、スラリと言いました。
臙が、こう主張しました。「この子の両親を、皆で探すのよ！」
でも、

「さあ、宿屋でも探すか！」 「宿屋もいいけど、腹減った！」
「その前に、買い物が必要ですよ。悟空、テイトさん」 「
・・・」 「三蔵と悟空とテイトで、宿屋探してこい！」
「じゃあ、私と八戒さんと悟浄さんで、買い物ね！」などと、勝手に話が進んでいます。

(皆、人探しが嫌なのね。いいわ。私、一人で探すから！でも、煉と一緒に探せたら、どんなに幸せなんだろう。って、メルヘン信じてるガキじゃあるまいしね〜)と、その時、
「月夜。その子の両親、一緒に探してやるよ・・・」顔を赤らめた煉が臙に、言いました。

「え？いいの？」(メルヘンゲットー！！！！！！) 裏臙発
生！！

「ああ。一人じゃ、危ないし・・・」
こうして、臙と煉は少年の親を探しに行くことに
臙と煉は、少年を連れて、街の人達に聞き込みをしました。
「すみません。この子の両親、知りませんか？今、探してるんですけど・・・」
臙は、近くにいた人に聞きました。

でも、「知らない」と答えました。

時には、朧と煉のことを、『若い夫婦だね!』という人々もいました。

その頃、悟空達はというと……

「なあ、三蔵。腹減った!」悟空は、三蔵の袖を引っ張って言いました。

「うるさい!!」三蔵のハリセン攻撃が!!

「イッテー!!!!!!!!」

「テイト!あの薬、ちよーだい!」悟空が、テイトに言いました。

「OK!三蔵に試せ!」テイトが悟空に魔法薬を渡しました。

その時、スパコーン!! 三蔵のハリセンが二人を打ちました。

「「イッテ!」」二人が同時に叫び声をあげました。

「俺、何もしてないぞ!」テイトが三蔵に訴えています

「なんとなくだ……」と三蔵が答えました。(それで、い

いのか!三蔵様!

「なんとなくって……」テイトはその理由に、納得がいかな

いようです。

悟空は文句を言ってます。

「宿屋、どこにすんの?」テイトが三蔵に聞きました。

「あそこがいいか」三蔵はそらうと、一番近くにあった宿屋に向かっ

ていきました。中は、意外と綺麗です。

20分後。

チェックインが終わり、悟空達は部屋にいました。

「あ。ロートと八戒だ。」テイトが、窓から顔をだして言いました。

その後に、煉も帰ってきました。でも、朧がないのです。

「朧は？」 梧浄の質問に、煉はこう答えました。

「あの子供、妖怪の子だったんだ。月夜が人質になってる。三蔵一行を連れて来いと……」

「あのバカが。」 テイトがつぶやいた。

「のむ、どーする？」 「助けなきゃ！朧、殺されちゃうよ！」

「うるさい！今、考えてんだよ。おい！あのガキの居場所、わかるか？」

テイトが、煉に聞きました。

「知らない……」 「どーするの。ねえ、テイト！」 「うるさい！黙れよ！」

その言葉に、ロートの顔に怒りが……

「人の話、最後まで聞いてよ！」 ロートの怒りが爆発！！

「うるさい！」 「朧を、助けるんでしょ！だったら、早く行かないと！」

「どこに行くんだよ！行く場所知らないくせに！」

「情報収集よ！」 二人の口喧嘩が始まりました！（怖いよ……

）
「やめるよ、二人とも！」と、そこに煉が止めに入りました。

「うるさい！！」 二人に睨まれた煉は、心から朧を呼びました！その時、妖怪が乱入してきました！（やばいです！）

妖怪の一人が、何かを言っていますが、テイトとロートの喧嘩にかき消されました！（それは、すごい！）

妖怪は、顔を怒りにゆがませ、二人を攻撃しようとしてました。

けど、テイトとロートが同時に「黙れ!!」「と言いました。そして、二人のダブル・キックが!!!!」

「アタアーーーー!!」　　ロート　　「おんどりャーーーー!!」
テイト

妖怪、見事に気絶しています。「あんの、クソバナナ!!」「テイトとロートは、次々に妖怪を気絶させていきました。

その後、臙は助け出され、テイトとロートにボコされました!

～終わり～

アニメの世界へようこそ！第六章

「つまんなーい！」おはつ 臃が大声で言いました。

「黙れ」テイトの冷たい言葉。

「だって。三蔵達、どこか行っちゃったもん。つまないじゃない」

臃は頬を膨らませながら言いました。

「それに。煉だって……」

（あーあ。煉がいたら、二人だけで話しようと思ってたのに。どうか、出かけちゃうんだもの、よけい、つまらないじゃない。

それに、煉は最近、ルートに興味があるみたいだし。

私だって、私だって、一生懸命に頑張ってる、煉にアピールしてるのに、振り向いてももらえない。

色気で、せまってもダメだってし……

それどころか、何もしてない、友里恵の方に……

私、ルートにライバル心燃やしてる？テイトなら、わかるけど。

ルートに？） 裏臃

「臃、どうしたの？」とルート。

「あ。何でもない。」臃がこめかみを押さえながら言った。

「どこか、具合でも悪いの？だったら、医者に……」「ルートが言い終わらない内に、臃がさえぎった。

「なんでもないって、言ってるでしょ……！！！」怒り爆発。

帰ってきた三蔵達もびっくりしています。

「どーかしたのか？」悟空が臃に聞いた。

「なんでもない。」私はそう言って、部屋を出た。

「なんだ、あいつ。」とテイト。

その後、夕食の時間にも私は来なかった。でも、こっそりと様子をうかがっていた。

「私、臙に何かしたかな？」ロートが不安そうに聞いた。

「何も、してないと思う！」と煉。

(やっぱり。煉は、ロートのこと好きなんだ。でも、何でこんなに、イライラするんだろう？)

「でも、怒鳴られた。私、気づかないうちにばっちゃんを、傷つけたのかもしれない！だったら、臙に誤らなくちゃ！」

三蔵一行も、その話を黙って聞いていた。

「でもさ。臙があんなにイラついてる顔、怖かったかも・・・」と悟空。

また、怒りが込み上げてくる。

私は部屋のドアを、バンツ！！と開けて中に入った。

「どーせ、私は怖がられてばかりですよーだ！フン！！」

すかさず、ロートが私に誤った。

「ごめんね。」と。私はその言葉に、ムカついた。

「なに？それで、私が気分を良くしたとでも思ってるの？ふざけないでよ！！」

アンタに誤られたぐらいで、気分が良くなるわけないでしょ！！」

私の言葉に、皆驚いている。でも、テイトは違った。

驚きもしないし、こっちも見えていない。魔法薬を作っているだけだ。急に、私の心に自分のみじめだっという気持ちになった。

(ロートは煉に好かれて、テイトは三蔵達とも仲良くなってる。で

も、私はテイトとロートと煉としかしゃべってない。

三蔵達とはあんまりしゃべってない。どうして、私だけ惨めなんだろう？

皆、同じじゃないの？

なのに、どうして、テイトは今の私を見ようとしらないの？

関係ないから？ めんどうだから？ ただ、魔法薬を作るのに夢中になって、気づかないだけ？そんなのおかしい。見もせずにいるなんて………)

「なに、一人だけすました顔してるのよ。」私はテイトに聞いた。

「そんな顔した、憶えないけど？」テイトの冷たい言葉。

「じゃあ、何で私を見ないの？」

「いつもの喧嘩に、どーして俺が、首を突っ込まなくちゃいけないんだ？」

その言葉に、私は怒鳴ってしまった。

「優等生ぶってんじゃないわよ！アンタ、最近、うざいのよ！消えてよ！」

テイトは、ため息をついて、私にこう言った。

「うざくて結構。邪魔みただから、お前のお望み通り、消えてやるよ。」

私や皆に背を向けるテイトの長い髪を、私は力を込めて強く引っ張った！

その勢いで、冴未は尻餅をついた。

でも、悲鳴は上げなかった。私の行動に皆驚いた。

(フン。私を侮辱するからよ。)と心の中で呟いた。

「テイト、大丈夫？」ロートがテイトのそばに駆け寄った。

「………」テイトは無言のままだ。

(何よ。また、優等生ぶっちゃって。生意気なのよ。)と、呟く。そのまま、テイトは自分の部屋に戻っていった。でも、最後の目つきは、ゾツとした。凍るような目つきだった。

「臃!どうして、テイトの髪を引っ張ったのよ!」

私は答えをださず、部屋に戻った。

「なんだ、あいつ」と悟淨。

「どうしたんでしょうかね、臃さんは」八戒も続いて言う。

「ほんつと。変なの」悟空も言う。

「勝手な奴だ」最後に三蔵が言った。

私は、今、悟った。自分の行動に腹をたてていた。

(どうして、あんなことしたんだろう?する気じゃなかったのに。急に、別の意思が動いて……)

(でも、ルートがいなかったら、煉は私と恋人になってたはず……)

友里恵さえ、いなければ。)

私は、ふとあることを思い出した。

テイトの部屋から、精神崩壊の薬を盗み出すのよ。

以前、街中で、人を傷つけるが楽しいという犯罪者に会った。

テイトは、その薬を犯罪者に飲ませた。

すると、その犯罪者は、子供みたいになってしまったのだ。

あの薬さえ、あれば、ルートを傷つけられる。

テイトは眠っていた。

そっと、精神崩壊の薬に手が伸びる。

それを、そつと掴むと、私は部屋に戻った。
明日、ロートを呼んで、この薬を飲ませる！！

翌朝、私は寝ているロートの枕元に、手紙を置いた。
その後、別荘の裏で待っていた。
すると、一つの影が見えた。ロートだ。

「私に何か用？」ロートにしては、めずらしい口調の答えだった。
「ええ。昨日のことで・・・ね。仲直りの印に、これ、あげるわ。
飲んで。」

「ありがとう。私も、あなたと仲直りしたかったの。」ロートはそ
ういうと、

私の手の中にある薬を手に取り、口に運ぶ・・・
が、それを親指と、人差し指で粉々につぶした。

私は驚いた。

「それ、楽しい？」ロートが私に聞く。

「え？」

「そんなことして楽しい？」ロートが聞く。

いや、ロートになりすましたテイトが言った。

「私をだましたの？」

「どう？この芝居、上出来だと思わない？」テイトが聞いた。

「ええ。とつても上手だね。で、なんで、ロートの格好になってる
の？」

「お前の行動を止めるため・・・かな」

私は黙ったまま、テイトの言葉を待った。

「精神崩壊の薬は、あの時の一つで終わりさ。」
「なんですって！」

「じゃあ、私が盗んだ薬は……」

「そう。別の薬。ただの、ビタミン剤。」テイトは、冷たい目で私を見た。

私は、あっけにとられて、物が言えなかった。

「人を傷つけるな。今回は、反省文10枚以上書け！そしたら、許してやるわ」

「……わかったわ」

その後、私はロートに誤った。もちろん、泣きながら、必死に……

煉も、その様子を見て、私を優しく抱きしめてくれた。

ただ、煉がロートのことを好きだというのは、私の勘違いだった。

私のことを話していたところを、偶然見てしまったのが、勘違いだった。

友里恵に何度も、泣きながら誤って、許しをえた。

私は、ロートの笑顔にびっくりした。

り

〜 終わ

しかたなく、この森で野宿することとなった。

「最悪。お風呂、入れないじゃない!!」

「それは、ヤダね」

「.....」

「でも、川ならありますよ」

八戒がにこやかに笑いながら言った。

「冷たそう.....風引くよ、ぜったい」臃が悪態をついた。

「でも、ないよりはマシだろ」と冴未。

「そりゃ、そーだけど.....」

「臃、我慢しようよ」

「うっ.....」

嘆く臃に、誰も声かける者はいなかった。

「腹減ったー!!!!」

悟空が空腹を訴える。確かに、日が沈んだ後のこの時間は、空腹にもなる。

ひとまず、三蔵一行は夕飯を食べることにした。

「あれ？テイトは？」

悟空は、テイトがいないことに気づき、そう口にだして言った。

「そっいえば、見当たりませんか」

「なんだと」

三蔵の不快気な声が響く。

「まさか.....」

「それはないと思うぜ、悟空」

「でもさっ!!」

「妖怪の気配はしません。大丈夫でしょう」

「テイト、どこに行ったんだろっ」

「そこらへん、散歩でもしてるんじゃない？」
臙は軽く答えた。

だが、その時、青い光が三蔵達の目に入った。

「な、何だよ今の！」

悟空は身を乗り出してそういった。

「とにかく、行ってみましょう」

尚、青い光は放ったままである。その光を頼りに、その場所へと進む。

「ひょつとして、テイトがそこにいるかもっ！」

奈奈の言葉に、悟空が答えを返す。

「いると思うぜっ」

青い光の場所へとたどりついた三蔵達は、驚いた。

広場ほどのスペースが空いている所に、青い光発するものがある。

何か分からない陣が、その青い光を発していたのだった。

陣の真ん中に、テイトが立っていた。

「テイト？」

臙がテイトに近づこうとするが、その手前でバチィッ！とい音と共に、臙が飛ばされた。

「結界？」

悟空が言った。だが、悟空は如意棒を取り出し、結界へと向かっていく。

「おおおおりゃあああ！……！！！」

バチィィィィィ！という、音と共に青い光が悟空を吹き飛ばした。

「テイト！」

「うるせえ……！」

ゴソッ！という鈍い音が。

テイトはそこら辺にあつた石を、臙にぶつけた音だった。臙達は後ろに振り返った。そこにはテイトが片手に本を持ったまま、不機嫌そうな顔をして、臙に近づいた。

「読書の邪魔したら、殺すって、言ったよなあ〜!!」

「え?え?」

「待てよ!そんなことより、あれは誰なんだよ!ってえ、また増える!」

悟空が青い光を発している陣を指差していった。

が、そこに新たに、臙とルートに似た何かが、現れていた。

「ドッペルゲンガーじゃねーの」

「はあ?ドッペルゲンガーって、あの、ドッペルゲンガー?」

「妖怪の気配はしませんし、式神ではないでしょう」

青い光は消えた。

ただ、そこには、臙、テイト、ルートに似た何かがいる。

三人が臙達を見据えている。

「殺す!」

二セ臙が臙に飛び掛ってきた。

臙はサツと避けた。だが、次の手がくる。

「何、これ!」

臙が二セ臙の攻撃を避けながら、言った。

「さーな」

「って、あんた何、一人だけ余裕ぶっこいてんの!!」

「もう、終わった」

テイトの横には、偽者が倒れていた。

「お前、まさか・・・」

「魔法薬、55番を飲ませたら、倒れた」

「マジで……って、うわわあ！」

「月夜!!!」

煉が臙に向かって叫んだ。

「煉！」

臙がニセ臙にやられる寸前に、煉が臙をかばった。

その光景に、一同は啞然としていた。

「なるほど」。そういう関係か……データ追加っ！」

「データ追加?……プチッ」

何か切れる音がしたと同時に、臙がテイトに歩みよってきた。

「こおらあ、テイトおおおお!!!どういうことじゃ、これは

!!!!!!」

「俺が作った証拠は？」

「この陣、お前の魔術専用の陣だろうが！」

「……」

「なんとか、言わんか……!!!」

「魔術で私とロートを造ってなににする気やったんや……!!!」

「なにつて、やだな」

テイトの薄笑いが、よけいに臙の神経を逆なでしていた。

「こおおおらああああ!!!……!私は、実験台やない!!!」

「ふっ」

「なにが、ふつだ!!メツチャ、恥ずいじゃん！」

「いい思い出にでも、なつたんじゃねーの？」

テイトの言葉に、臙はしぶしぶ頷いたのだった。

三蔵達を無視して話している臙とテイトをよそに、三蔵一行は、ヒソヒソと何かを話していた。

「僕達、無視されてますね〜」

「でも、にぎやかでいいじゃんか」

「うるせえんだよ」

「いやーん、三蔵様ったらあん！こ・の、テ・レ・ヤ・さん」

「死ぬか？」

「遠慮しまーすッ」

「なら、黙っている」

「にしても、にぎやかだな〜」

「そうですね〜」

「三蔵ー、腹減った！」

「そこらへんの、草でも食ってる」

「いらねーよ、そんなもん！」

「核煮ー。手羽ー。ハムー。牛肉ー。豚肉ー。ソーセージー。ハン

バーグー。焼肉ー。しゃぶしゃぶー。ステーキー。オートミールー。

」

「酒ー。女ー。タバコー。」

悟空に続いて、悟浄までもが言ったあげく、二人は三蔵のハリセンでやられることとなった。

「江ちゃん達、話し終わった？」と、タイト。

「誰が、江ちゃんだ。」

「いーじゃん」

「殺すぞ」

「三蔵様ったら、かーあわーあーいーいーいーWW本当に、テ・レ・ヤ・さ・ん、なんだからあん」

悟浄が三蔵を茶化すように言った。

ガウンッ！ガウンッ！と、三蔵の愛用である銃が、火を吹いた。

「腹減ったあああああ！！！！！！！！！」

「僕達を食べるのだけは、やめてくださいね^^」
こんな風に、三蔵一行は毎日のように、にぎやかになり、明日の朝
を向かえることとなるのだった。

～終わり～

アニメの世界へようこそ！第八章

三蔵一行は、ある街の宿屋に泊まった。
でも、部屋には誰もおらず、しんと静まりかえっていた。

「久々のお風呂よー！」

朧おぼろが宿屋の温泉に、今にも飛び込みそうな勢いで、お湯につかった。
「本当に久々だね」

ロートも同じこと言いつつも、朧とは違う態度でいった。

「そういえば、三蔵達と旅して、何ヶ月か経ったけど、どう思う？」
「そうだね。でも、あつという間だったね」

「ねえ、テイト、ロート。三蔵のことどう思ってる？」

「三蔵は好きだぞ。キャラ的にな」

「どこがいいの？生臭坊主じゃない」

「ハリセンで殴ると、痛そうだねー」

「あれ、むっちゃ、痛い！だって、本気でやるんだよ！ひどくない？」

「それが、三蔵なんだって。そうじゃなかったら、三蔵の魅力が台無しじゃん」

「えー。まあ、キレーなのは認めるけど」

「三蔵、怒ると怖いもんね。機嫌とるのがやっとだよ」

「そうそう！つか、機嫌って、言ったって、いつも不機嫌な顔してるじゃん」

「そういえば、そーだね」

でもさ、機嫌いい時は、少し笑うぜ」

「あの、三蔵が！？」

「何言ってるの、ばっちゃん」
「じゃあ、ごぶりよ?」
「それも、中国の国名」
「江流だよ!!」
「そう、それ!こーりゅー!」
「に、しても、三蔵に合ってる名前ね!」
「うん。いかにも、お坊さんって感じじゃないもんね!」
「うん、うん」

すでに、三蔵の話で一時間が過ぎた。

「じゃあ、悟空は?」と奈奈。
「食いしん坊な、お猿さん!」
「ロート、それ、あってる!」
「そうか?」
「え?テイトは、違うの?」
「可愛くない、悟空って?」
「そう?胃袋なバカ猿じゃないの?」
「18歳なのに、子供らしいってのが好きだな」
「悟空って、18なの!見えないしー!」

「18だったら、170センチは、身長あるでしょ」
「悟空、165センチぐらいなんだよね?」
「身長も小さいから、いいんだって。そこが、悟空の魅力なんだよ」
「へー」
「関心、してねー声だな」
「ネットで調べてみるよ」
「えー。面倒くさ〜〜い」
「あそ。んじゃ、死ぬ」
「てっ、えええええ!?!?!?!いきなり、死ぬってないじゃん!?!」

「悟空つて、金姑はずすと、どうなるの？」
「暴れる。全てがなくなるまで」
「マジ！」
「でも、三蔵が助けるんだぜ！そんな時の三蔵がかっこよくってさー
！つつい、読み返しちゃうんだぜっ！！」
「も、いいです」

悟空の話で、約二時間。

「八戒は？」
「優しいよね〜」
「うん。あの人はいいよな、ロート！」
「でも、妖怪なんだよね。まあ、そんなことは気にしないけど〜」
「え？八戒さんつて、妖怪なの？」
「ウソオ！マジで〜。あの優しい人があ？つつわ〜ありえない！」
「いちいち、文句をつけるな」
「んなこと言ったて、ついちゃうもん、仕方ないじゃん！」

「妖力制御装置つて、耳のカフス？」
「そう。あれ、全部はずすと、妖怪になるんだぜ」
「へー」
「でも、妖怪、人間、関係ないしね〜私達」
「そうそう。気に入ったキャラがなんであるうと、差別なし！つて
感じだし」
「えー。でも、私は人間がいいな〜」
「お前、差別しすぎなんだよ。この、クソバナナ」
「ロートまで！！」

「ロート、最近、腹黒くなっただね〜ますます、八戒に似てきた？」

「そうかな？」

「八戒つて、腹黒いの？」

「と、いうより、毒舌」

「マジで……八戒が……！うわ……。どんどん、八戒のイメージが崩れてくし」

「俺は、お前のキャライメージが崩れてくよ」

「ヒドッ！」

「んなこと知るか」

「ロートが、すごい変わったような気がする……」

「私は普通なただけだな^^」

「ぜってー、普通じゃない」

「え？何かいった？」

「イイエ、ナンデモアリマセン」

「八戒さんつて、料理も得意なんだよね？」

「ああ。悟空がよく、上手いって言ってるけど」

「食べてみたいな」

「なに、友里恵。八戒に恋しちゃった？」

「何、言ってるの。ばっちゃん？」

「ゴメンナサイ……ジヨウダンデス」

「八戒の料理だったら、食ったことあるだろ？」

「え？」

「前に、八戒が作ったケーキ、俺食ったけど……」

「のむ、ずるいよおおお……！！！！！！」

「は？何がずるいんだよ？」

「私も、食べたかったー！！！！！！」

「ロート、それは絶対、八戒に対する恋愛感情を持つてるね」

「バナナは黙ってる」

「……………」
八戒の話で、約二時間。

「悟空、よかつたな」

「臃とは違つて、テイトはお前のこと好きだつてよー！」

「うるせえよ、エロ河童！」

「うるせえんだよ」

「そろそろ、でない？」

「まだ、ダメですよ。悟浄のこと聞いてませんから」

「おい……………」

「まあ、お前のへこみ面を拝むとするか」

「つて、おい！」

「俺も、聞く」

「にしても、八戒はモテルねえ」

「ロートか。以外かもな。だつて、あんましゃべんないじゃん」

「そうだよな。臃とテイトは煩いが……………」

「まるで、お前等みたいだな」

「んだと！」

「おや、臃さん達が話はじめたようですよ？」

「マジで！」

「静かにしろ」

「……………」

「三蔵と悟空と八戒は話しあつた。あと一人は、悟浄ね。」

「悟浄はそりゃ……………」

「超変体野朗だろ」「」

「意見そろつた！」

「やっぱり、そう、思つんだな」

「だよね^^」
「あんな、変態がいたら、世の中、困るよね？」
「だな」
「うん」

「あー。なんか、お腹空いた」
「そーだな」
「ホントだね」
「つかさ、何時間、俺等、風呂入ってんの？」
「何時間だろ？」
「そろそろ、でようか」
「そーだな」
「でもさ、最後の悟浄の会話だけ、むなしいね」
「そうだね」
「これおいつて、話すこともないしな・・・」
「まあ、変態さんでいいんじゃない？」

「そーだな」
「それで、いつかー!!」
「あー。気持ちよかったああ!!」
「一番ほめてたの人って、誰もいないよね？」
「あああ!!」
「どうかしたの、臍？」
「煉の話し、してない!!!!」
「えー。もい、いいじゃない」
「じゃあ、寝る前につ!!」
「寝る前に奴の顔なんざ、思い出したくもない」
「そーそ。ばつちゃん、一人で語ってなよ」
「ヒドッ!!メツチャ、酷い!!!!」

梧浄の話た時間、約10秒。

臃達がでたあと、悟空は大笑いした。

「梧浄、だっせー！！！！！！」

「ふっいいいざまだな」

「そうきましたか。やりますねえ、臃さん達も^^」

「八戒・・・笑顔はやめろ」

「僕、これが普通なんですけどねえ^^」 八戒、楽しんでる。

「・・・」

「俺達もどよーぜ！！熱いい」

「そうですね。ですか、のぼせたんじゃないですか？」

「そうかも」

「あんな長時間、風呂に入ってたことねーもん」

「そうですね。僕も始めてですよ」

「テイト達の風呂入る次官って、長いな」

「女つてのは、そういうもんなんだよおおおお・・・」

「・・・」

「へこんでるよ、梧浄の奴」

「うるせえ！！バカ猿がああ！！！！！！」

「バカ猿ゆーなー！！この、エ口河童！」

わり〜

）終

アニメの世界へようこそ！第九章

街の宿屋に宿泊して、朝がきた。

部屋の組み合わせは、なんとも異様なものだった。

三蔵とテイトが同じになっていたのだ。

三蔵が目を覚ました。

「は？」

自分の身体が、やけに小さくなっているの気がついた。

よく見ると、それはテイトの身体だった。

三蔵は部屋にある鏡を見た。やはり、姿はテイトだった。

「おい、起きろ！」

「なんだよ、三蔵……って、んだこりゃ……！」

テイトも異変に気づいたのか、叫んだ。

「なんで、俺、三蔵になってんだ……!?」

「俺の身体で、そんなことをするな」

「ああ」

「精神だけ、入れ替わったのか？」

「だろうな」

「ばれたくない？」

「当たり前だ」

「じゃ、芝居するしか……」

「、」

「俺はいいけど、三蔵は俺を演じられるか？」

「……」

「いった方が……」

「ダメだ。あいつ等に言ってみろ、笑い者だ」

「それは、断る」

「しかたねえ。やるか……つか、三蔵の銃を使えるとは！」
「だから、俺の顔で嬉しそうな顔をするな」
「まあ、三蔵の場合、そのままやってりゃ、いいんじゃないの？」
「フン」

隣の部屋おほろ 臃と悟浄

「なんだこりゃあ!!!」
二人の声が重なった。
やはり、臃と悟浄も身体が入れ替わったみたいだ。
「どうなんての〜!なんで、悟浄の身体に!!!」
「んだこりゃ!」
慌てふためく臃と悟浄はお互いの頬をつねってみた。
「いのでで!!!!!!」

「夢じゃ……ない>m(____)m<」
「どつする、悟浄?」
「ばれると、あいつ等に何言われるか……」
二人は三蔵達が今の自分達を見て、嘲り笑う姿が目に見えた。
「絶対、嫌!悟浄、演技よ!!!」
「それしか、手段がないな……」
「うん」

一方、八戒とロートの部屋も同じことに。
「私と八戒さんは、大丈夫ですよね?」
「そうですね^^」
結果オーライという感じで、にこやかに笑っていた、八戒とロートだった。

なぜかしら、悟空が一人部屋だったので、誰とも身体が入れ替わるはなかった。
それだけのことあって、悟空は自分以外の人達の身体が入れ替わったことは知らなかった。

「おっはよー！」

悟空が、みんなの待つ部屋に、元気よく挨拶をしながら入って来た。

「おはよう、悟空」 臃（悟浄）

「おはようございます、悟空」 八戒^{ロト}

いつもなら、テイトもあいさつをするのだが、今日はしてこないことに気がついた悟空は、テイトに、もう一度あいさつをした。

「おはよう、テイト」

テイト（三蔵）は三蔵の向かい側のテーブルに座っていた。

二人の目が合う。

（おい）

（やれ）

（……）

（ばれたくないんじゃないのか？）

などと、目で会話していた。（ある意味、すごいこと）

「……おはよ」

三蔵は照れくさそうにそういった。

「三蔵、おはよう！」

「ああ」

いつものように三蔵がそっけなく返すやりかたを、テイトは知っていたおかげで、誰もが三蔵だと思った。（実際はテイト）

「あれ？悟浄は？」

「さあな」 三蔵^{テイト}

「トイレじゃない？」 臃（悟浄）

「くだらん」 テイト(三蔵)

「」「」「テイト(さん)???'」「」「」

(おい……)

(……)

「くだらないことでも、してるんじゃないのか?」

ちよつと、恥ずかしい三蔵だった。

「そうかもな」(なんか、変だ。) 悟空

三蔵一行は、街に買い物へ。

「三蔵、あれ食いたい!」

悟空が店にある肉まんを指差して言った。

「却下」

すかさず、三蔵テイトが言った。いつもの、三蔵のように。

「なんでだよー!!ケチー!タレ目ー!」

「うるせえ!!」スパンツ!!

三蔵テイトが、悟空の頭の上にハリセンを勢いよく落とした。

「いってー……!!!!!!」

(やるな)

(そりゃどーも)

(フン)

(江ちゃんも、ちゃんとやれよ)

(……)

の会話は、三蔵とテイトの目の会話です。

「テイトオオオオオ」。三蔵が打ったあゝ

悟空が泣き言を言って、テイト(三蔵)に歩みよってきた。

(やれ)

(・・・)

(早く!)

(命令するな)

(じゃあ、さっさとやれ)

(――)

「そ、それは・・・悟空が悪いと・・・思う・・・」
「なんだよお、テイトも、三蔵の見方かよおお!!!!!!」

(名演技!)

(殺すぞ)

(今の立場では逆だぞ^^)

(・・・)

「なんか、今日。みんな変だ」

「『ギクツ!!』」

「そうですか?」 八戒ロト

「うん」

「悟空の間違えじゃないのか?」 悟浄(臃)

「そうだよ、悟空^^;」 八戒ロト(八戒)

「気のせいだろ・・・」 三蔵テイト

「・・・」 テイト(三蔵)

そんな会話が、一段落したところで、一行は本屋の前通り、宿屋に戻る事にしたのだが、三蔵テイトが本屋の前で立ち止まった。

「三蔵?」と悟空。

「この、本・・・」一冊の本を手にとって、三蔵テイトが呟いた。

「やっぱ、そーだ!」

スパーーーーー!!!!!!

「テメエ・・・」

テイト（三蔵）がついに、キレた！！（NO¥（。□¥）（ノ□。）
/ON）

三蔵テイトとテイト（三蔵）が、騒ぎ出した上、宿屋に帰った途端、悟空
以外の全員が、身体が入れ替わっていたことがわかった。

「マジかよ・・・」

「でも、ロートと八戒、全然わからなかった！」

「「「「「似たもの同士っ！！」「」「」」」」

「「^^^;::;」」

「あ・・・」

三蔵テイトが、何か思い出したかのような声で呟いた。

「どうしたの？」と悟浄（臍）

「悟空が寝てから、俺等、あの怪しい奴から貰ったまんじゅう、食
つたよな？」

「うん。それがどうしたの？」三蔵テイトの質問に疑問を抱く八戒ロート。

「あの中に、身体を入れ替える薬でも入ってたんじゃないのか？」

「「「「「「・・・あいつの仕業かつつ！！！！！！！！！！」」」」

「「」」

〜終わり〜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2570a/>

アニメの世界へようこそ！

2010年10月28日07時51分発行